

## 修道院手話「手まね」の疑問表現

柴田香奈子（筑波大学大学院）

### 1. はじめに

本研究では、これまで詳細に論じられてこなかった修道院手話（以下「手まね」<sup>1</sup>）における疑問表現の特徴について考察する。日本、ドイツ、オランダの厳律シトー修道院において、自らが収集した「手まね」の発話データの分析を行った結果、Wh 疑問文から非手指標識（NMM<sup>2</sup>）、Yes/No 疑問文からは語彙範疇から機能範疇への文法化が観察された。この結果から、「手まね」の発話は単に音声言語に従って線状に単語が示されるのではなく、3次元的に示される視覚言語的な側面を持ち、単なる単語の羅列ではない合理的な語順を示すことが明らかになった。

### 2. 「手まね」の概要

「手まね」という手指表現は、カトリック教会に属する厳律シトー修道会が戒律の「沈黙」を遵守するために何百年にわたって伝承されてきたコミュニケーション・ツールの一つである。現在、当該修道会は「手まね」を保持している唯一の修道会と考えられる。その起源はシトー会の流れを汲み、基本的に外部から完全に閉じられた観想修道会として1890年頃にフランスに創立された。他の修道会同様、時代の流れに伴って修道者数が減少の一途をたどっている。現在、当該修道会はヨーロッパを中心にして世界各地に広がっており、全体の修道者数は男子1693人、女子1529人である。一つの修道院に対して平均20人前後の修道士が自給自足の共同体を営んでいる。その中でも「手まね」の使用が残っている修道院はわずかだと考えられる。

### 3. 「手まね」の語順

「手まね」の語順について確認したい。「手まね」に明確な語順があるのかは不明だが、(1)に見るように動詞は比較的早い段階で示されることが多い。しかし、(2)のように話題や日時などの要素が入ってきた場合はその限りではない。

(3)は、be動詞にあたるサインが示されない例である。これまでの調査からも「手まね」にはbe動詞にあたるサインが存在していないことがわかっている。

<sup>1</sup> 修道士が規律遵守のために使用する手指表現は一般的には「修道院手話」と呼ばれることが多いが、発表者が調査を行った日本、ドイツ、オランダの厳律シトー修道会では、ろう者が使用する「手話」と区別する意味から、それぞれ「手まね」、「Zeichensprache」、「teken taal」という呼称が伝統的に用いられていた。本稿では、発表者が自ら調査を行った修道院手話については「手まね」と表記する。

<sup>2</sup> 非手指標識（non-manual marker: NMM）と非手指信号（non-manual signal: NMS）の区別に関しては様々な議論があるが、本稿ではNMMを採用する。

- (1) a. /私 歌う 大きい/ (私は大きな声で歌う)  
 b. /修道院長 怒る 修練者 悪い 仕事/ (修道院長は修練者の仕事ぶりに不満である)
- (2) a. /PT2<sup>3</sup> 今日 働く 畑/ (今日あなたは畑の仕事ですよ)  
 b. /今日 女性 来る/ (今日は女性 (お客) が来ます)



- (3) a. /今日 大斎 (断食) / (今日は大斎です)  
 b. /PT1 キッチン シスター/ (私はキッチン係のシスターです)



#### 4. 先行研究と問題点

アメリカの当該修道院で調査を行った Barakat (1975) は、著書: *The Cistercian Sign Language* の中で、シトー修道会の手話の構文には、音声言語（ここでは英語）の影響が見られると指摘している。確かにこの著書で報告された 91 個の例文には、(4)に見られるように少なからず英語の語順等が影響していると考えられる。

- (\*) a. Barakat による例文 (原典のまま表記)  
 a1. 修道士 1 が、a の例文をシトー会の手話で訳したもの (原典のまま表記)  
 a2. 修道士 2 が、a の例文をシトー会の手話で訳したもの (原典のまま表記)

- (4) a. He is not tall.  
 a1. signs of point to person+ NO<sup>4</sup>+TALL

<sup>3</sup> PT1 (一人称)、PT2 (二人称)、PT3 (三人称)

<sup>4</sup> 大文字表記はシトー修道会における手話単語である。

a2. 表記なし

b. My car is the same color as yours.

b1. signs of ME + DRIVE +MACHINE +SAME+ PAINT +LIKE +YOU+DRIVE+ MACHINE

b2. signs of paint + ME+ DRIVE +MACHINE+EQUAL+TWO+YOU+ DRIVE+ MACHINE

c. Is that the abbot?

c1. signs of point to person+ ABBOT+questioning look

c2. signs of WHAT+ ABBOT

Barakat の研究に関する問題点として、調査方法とその質問内容があげられる。Barakat はアメリカにある厳律シトー修道会において、数人の修道士に英語の例文を与えて、それをシトー修道会の手話で訳させるという方法を取った。その為、(4)に見られるように、例文に従って単に手話単語を並べたような表現が数多く示されることとなる。また、修道院内での生活には全く関係のない事柄に関する例文が数多く見られる。例えば(4b)は、修道士は個人的な財産や私物を所持することが許されていないので、修道院内では不必要な例文であり、(4c)については、修道院内で修道院長を知らない者は一人もいない。こういった修道士にとって非現実的な例文からは、彼らの自然発話を観察することができなかったと考える。斉藤（1999, 2003）は、Barakat のデータについて、必ずしも音声言語の影響が強いとはいえず、指差しや NMM が表出する点で視覚言語としての特徴を有していると主張している。また、Villwock（2012）は Barakat のデータを基にして、修道院手話とろう者の手話言語の統語的な共通点を探る研究を行っている。しかしこれらの研究においても主な分析対象は Barakat のデータに留まり、その議論は十分ではない。また Barakat の報告も含めたシトー会の手話に関する研究では、これまでに撮影データが使用されたことはなく分析には大きな制約があった。

## 5. 調査方法

本発表に関する調査は、日本、ドイツ、オランダの修道院において「手まね」の話者（以下「話者」と記述）に、昔話や思い出話、日常的に使用されるフレーズなどについて自由に「手まね」で語ってもらうという形式で行った。発表者が聞き手となって進められたこの談話の様子は、話者に承諾を得て iPad にて撮影されている。1 回の撮影は約 4 5 分で行われ、同じ話者には 2 ～ 3 年をかけて数回の撮影を実施している。その後、それぞれの調査地で収集された自然談話の動画データから疑問表現を抽出し、その中から共通点を探り分析を行った。話者の内訳は日本の修道院が 4 人、ドイツ 6 人、オランダ 2 人であり、全員が 20 歳前後で「手まね」を習得している。国籍別に分けると日本 4 人、ドイツ 3 人、オランダ 3 人、ベルギー 1 人、不明 1 人となっている。

## 6. 分析

ここでは調査データに頻出した疑問表現に注目し、Barakat のデータと比較しながら検討を行った。その結果、以下の特徴が観察された。

## 6-1. 3 次元的に示される Wh 疑問文

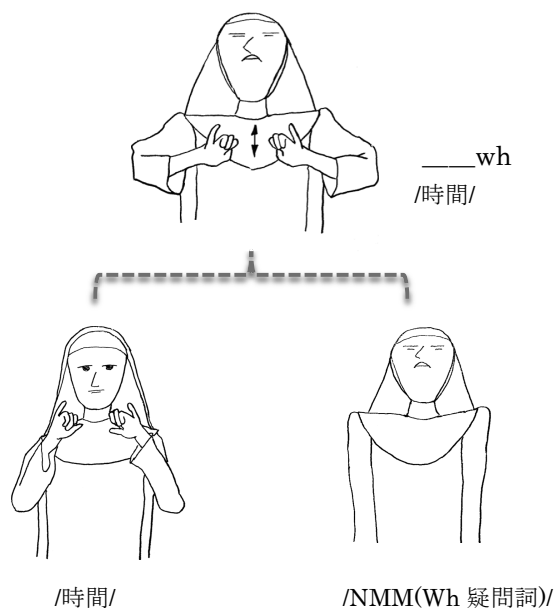
(5) a. When is matins?

a1. WHAT+ TIME+NIGHT+ SING

a2. WHAT+ TIME+MORNING+ PRAY

\_\_\_\_wh

(6) a. /時間/ (今何時ですか?)



\_\_\_\_wh

b. /PT2 書く/ (お名前は何ですか→名前を書いて下さい)

\_\_\_\_wh

c. /トイレ/ (お手洗いはどこですか?)

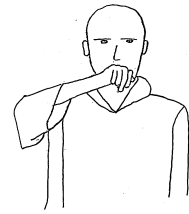
(4c)と(5)では、What を示すサイン (両手のひらを上向きにして、外側に両手をひらく) が示されている。この Barakat の報告では、What 以外の Wh 疑問詞は観察されず、(5)に見られるように When を示す際は What と time を組み合わせて表現されており、他の Wh 疑問詞についても同様の操作が行われている。しかし何れの表現も音声言語の様に線状的な表現に留まっており、また同じ修道院内であってもその表現方法に統一性がないといえる。

(6)では英語の Wh 疑問詞を示す肩と顎をあげるという NMM が観察された。(6a)では、時間という単語と、Wh 疑問詞の NMM が同時に表出されて「何時ですか」という意味になる。線状でなく、同時的に示されたこの「手まね」の表現は、本研究ではじめて明らかになった視覚言語的特徴の一つと言える。しかし、この Wh 疑問詞にあたる NMM は、これまで女子修道院のみで観察され、男子修道院では Wh 疑問文は観察されていない。男子修道院では、「今何時ですか?」という内容表現については「時間を教えて下さい。」という

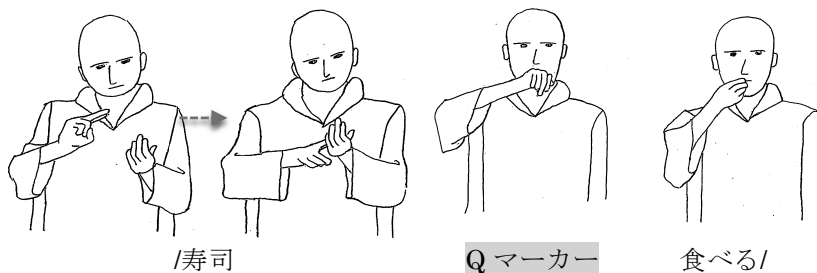
ように依頼文へと表現を転化させて表現していた。Barakat の報告と鑑みても、いずれの男子修道院においても共通した Wh 疑問表現は観察されなかったと言える。

## 6-2. Yes/No 疑問文に見られる語彙範疇から機能範疇への「文法化」

- (7) a. /Q マーカー<sup>5</sup> PT2 仕事 終わる/ (仕事終わった?)  
 b. /Q マーカー 時計/ (時間を教えてもらえる?)  
 c. /石けん Q マーカー/ (石けん取ってもらえる?)  
 d. /トイレ Q マーカー 行く/ (トイレに行っても良いですか?)  
 e. /寿司 Q マーカー 食べる/ (寿司食べました?)



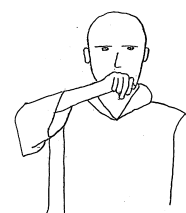
/Q マーカー/



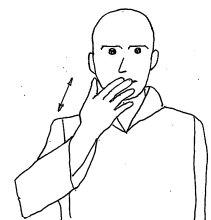
(7)で観察された Q マーカー (手の甲にキスをする) は、本来「奉公する・勤務する」という意味の単語であった。修道院内の内的な資料からは少なくとも 1950 年頃まではこの意味で使用されていたことがわかっていいる。しかし、これについては当該修道会で取り決めが行われたわけではなく、長い年月の中でいつか本来の意味を完全に失い質問マーカーとして機能するようになったと考えられる。つまり、語彙範疇が内的に機能範疇へ転化した文法化と考えることができる。ただ、国によって Q マーカーの表出する位置が異なるという結果が出た。冒頭に示される (7a) (7b) はドイツ、文末に示される (7c) はオランダ、中間に示される (7d) (7e) は日本で観察された。

## 6-3. 合理的な語順

- (8) a. /依頼マーカー 手伝う/ (手伝ってもらえる?)  
 b. /依頼マーカー 本/ (その本貸してもらえる?)  
 c. /依頼マーカー お茶/ (お茶持ってきてもらえる?)



/依頼マーカー 1/



/依頼マーカー 2/

ここまで Wh 疑問文と Yes/No 疑問文を見てきたが、実際は「手まね」の発話から、それほど多くの疑問表現は観察されない。これについては、修道院での「沈黙」戒律が関係していると考えられる。修道士は基本的には会話をしてはいけないので、誰かに何か質問をして、そこから会話が継続していくことを避ける傾

<sup>5</sup> 本稿では、発表者の調査で観察された質問マーカーについては Q マーカーと記述する。

向がある。よって、修道士は Yes/No 疑問文を合理的に依頼表現へと変化させて発話していることがわかった。(8)では、(7)で Q マーカーとして用いられたサインが、冒頭で依頼マーカーとして示されている。「手まね」においては、依頼マーカーとその後ろに示される依頼内容（名詞もしくは動詞）という組み合わせで依頼文が作られていると言える。ただ、依頼表現には2種類のマーカーを使用することができる。(8)の依頼マーカー2（右手を口に持っていきキスをする）は、本来は「感謝する」という単語から転じたものであり、依頼マーカー1に比べると使用頻度は低かった。

## 7. おわりに

以上、自身のフィールドデータから、「手まね」の疑問表現に関する特徴について明らかにした。これまで単に約束された人工言語が修道院という閉じられた社会で使用されていると考えられてきたが、実は「手まね」には以上のような視覚言語的な側面が観察される。また「手まね」の語順についても、これまで音声言語に沿って単語を並べたに過ぎないと考えられてきたが、Wh 疑問詞を示す NMM や Yes/No 疑問文に見られる文法化、そして疑問表現を合理的に依頼文へと変化させていることがわかった。

今後の課題は、国によって Q マーカーの表出位置が異なる点について、これまでに収集してきた「手まね」による談話データを精査しつつ、意味的・統語的な観点からの分析を行うことがあげられる。また、統一性が見られなかった男子修道院における Wh 疑問文については、より多くの Wh 疑問文のバリエーションを分析し検討していく必要がある。

参考文献：

Barakat, Robert A. 1975. *The Cistercian Sign Language: A Study in Non-verbal Communication*, *Cistercian studies series;11*, Cistercian Publications.

Villwock, Agnes. 2012. Monastische Gebärdensprachen und Gebärdensprachanwendung im Kloster. Vom Schweigegebot christlicher Ordensgemeinschaften hin zur gebärdensprachlichen Kommunikation in der monastischen Gehörlosenbildung. *Das Zeichen* 91, 266–282.

斉藤くるみ. 1999. 「代替手話の文法比較—修道院の手話と製材所の手話—」, 『日本社会事業大学研究紀要』, 46: 3-44

斉藤くるみ. 2003. 『視覚言語の世界』, 彩流社

松岡和美. 2015. 『日本手話で学ぶ手話言語学の基礎』, くろしお出版

ルイス.J.レッカイ.1989. 『シトー会修道院』, 朝倉文市・函館トラピスチヌ訳, 平凡社